

# 平成31年度 家庭部会研究計画

## 1 研究主題

### 家庭生活を見つめ 学び合い 豊かな生活を創り出す子供の育成

## 2 研究主題設定の理由

今日、日本社会はグローバル化や少子高齢化、高度情報化などにより、社会構造は大きく急速に変化し、多様な価値観の時代を迎えている。家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化、持続可能な社会の構築等の課題が山積しており、これからの時代を生きる子供たちには、社会の急激な変化に主体的に対応できる力が求められている。このような将来の変化を予測することが困難な時代にこそ、一人一人が自立し、家族や地域の人々と共に支え合う生活を創造することが重要である。

こうした中で、家族の大切さに気付き、家庭生活についての理解を深めること、自らの健康を考えた栄養のバランスのとれた食事をする事、日本の生活文化の大切さに気付くこと、消費者として必要な正しい知識を身に付けること、環境に配慮した生活をする事など、家庭科教育が果たす役割は大きいと考える。

将来子供たちが自立し、よりよい家庭生活を営むためには、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、自らの家庭生活を見つめ、課題について意識をし、解決への意欲を高め、生活をよりよくしようと工夫することが重要である。また、課題解決の過程において、子供同士、家族や地域の人々などと関わり学び合いながら学習活動を行うことで、自分の成長を自覚し、家族や家庭生活を大切にしようとする心情を育むことができると考える。そこで、「家庭生活を見つめ」「学び合い」を積み重ねることにより社会の変化に対応できる「豊かな生活を創り出す」子供の育成を目指し、研究主題を「家庭生活を見つめ 学び合い 豊かな生活を創り出す子供の育成」と設定した。

## 3 研究主題について

### (1) 「家庭生活を見つめ」「学び合い」とは

「家庭生活を見つめ」とは、子供たちが自分の家族や家庭、衣食住、消費や環境などの生活事象から問題を見だし、生活の課題に気付くことである。しかし、日常生活に特に不便や不十分さを感じることなく過ごしている子供たちが、自分のこととして課題を見付けることは容易ではない。既習の知識及び技能や生活経験を基に自分の日常生活を改めて見つめさせることで、疑問や発見が生まれ、「なぜそれをするのか」「なぜそのような方法で行っているのか」などの課題を設定する。このことにより、子供たちの学習意欲が高まり、見通しをもって、主体的に学習に取り組もうとする態度を育むことにつながる。と考える。

「学び合い」とは、子供たちが自分の見つけた課題を、子供同士で協働したり、家族や身近な人々などに関わったりしながら、解決する力を身に付けることである。他者と意見を交流しながら、家族や家庭、衣食住、消費や環境などについての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けていく中で、自らの考えを明確にしたり、広げたり深めたりする。さらに、家族や地域の人々と関わり合いながら課題を追究することで、家族や地域よさ・人々の願いや知恵・物の大切さにも気付くであろう。この新たな気付きや発見が、さらに高次の学びへと進み、家庭生活の様々な場面で活用できる確かな実践力を育てるにちがいない。

### (2) 「豊かな生活を創り出す」とは

「豊かな生活」とは、子供たちが家族の一員として家庭生活を大切にしようとし、地域の人々との関わりや環境に配慮しようとする中で創り出される生活である。子供たちは、日常生活の中から問題を見いだして課題

を設定し、一連の問題解決的な学習過程を積み重ね、課題を解決する力を養うことにより、自ら課題を解決できた達成感や、実践する喜びを味わうことができると考える。こうして自分の成長を実感させることは、家族の一員としての自覚をもたせ、よりよい生活を営むために工夫する実践的な態度を育み、自分の成長を支えてくれた人への感謝の気持ちを育てることにつながると期待される。また、限りある物や資源を大切に、環境に配慮した生活を工夫することが、将来安心して生活できる持続可能な社会を構築する基盤となる生活を創り出すであろう。これらのことを通して、豊かな家庭生活を創造していくための能力や心情が生まれ、やがてはそれが「生きる力」となっていくと考える。

## 4 研究内容

### (1) 指導計画の工夫

#### ① 2 学年間を見通した年間指導計画

2 学年間の学習の見通しをもたせ、子供や学校、地域の実態に応じて、家庭科で育みたい子供の姿を明確にする。基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けさせるために、どのように題材をつなぎ、積み上げていくか、学習内容の関連性や系統性を考えて段階的に題材配列を工夫する。家庭や地域での実践についても、学校や地域の行事等との関連を考えたり、長期休業等を活用したりするなど、計画的に位置付ける。移行期においては、各題材に、適切な時間を配分し、指導すべき内容に漏れがないよう留意する。

「A家族・家庭生活」の(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」では、(2)又は(3)を基礎とし、「B衣食住の生活」、「C消費生活・環境」で学習した内容との関連を図り、2 学年間で一つ又は二つの課題を設定して年間計画に位置付ける。

#### ② 他教科等との関連、中学校との系統性の明確化

家庭科と他教科等との関連を明確にするとともに、中学校の技術・家庭科家庭分野の内容を見据え、系統的に指導できるよう、教科等横断的に題材配列や題材構成を工夫する。これにより、子供たちがこれまでに学習してきた内容と中学校の各内容との接続が明らかになり、子供の理解の程度や思考の流れを予測するなど、見通しをもって指導計画を考えることができる。

#### ③ 「家庭生活を見つめ」「学び合い」ができる題材構成

子供が学びの意欲を持続させ、さらに学びの質を高めるために、「家庭生活を見つめ」「学び合い」ができる題材構成をする。「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、子供たちが気付いた生活の課題を実践的・体験的な活動を通して、解決していく学習を積み重ねていけるようにする。その際「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点を適切に定め、見通しをもって指導できるようにする。関連する内容の組み合わせを工夫したり、学習過程との関連を図ったりし、効果的な学習が展開できるようにする。家庭や地域での実践も、一連の学習過程として位置付けるようにする。

また、子供たちの課題追究の意識の流れを明確にするために、題材構想図を作成する。これにより、その題材で子供たちに「何をどのように学ばせるか」、「何ができるようになるか」が明確になり、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度へつながると考える。

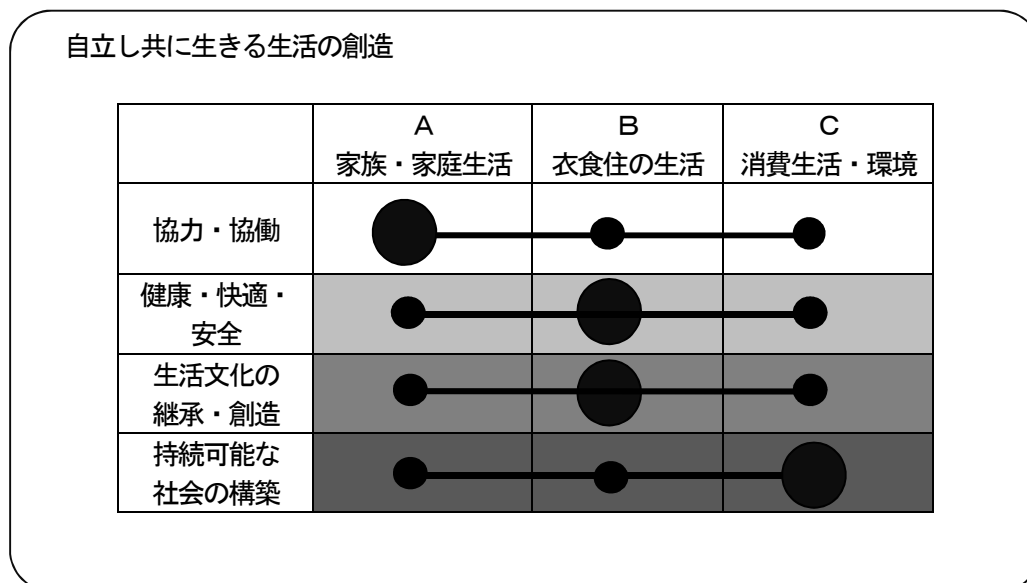
### (2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

「主体的な学び」とは、題材を通して見通しをもち、日常生活の課題の発見や解決に取り組んだり、実践を振り返って新たな課題を見付け、主体的に取り組んだりする態度を育む学びである。

「対話的な学び」とは、子供同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々などとの会話を通して考えを明確にしたりするなど、自らの考えを広げ深める学びである。

「深い学び」とは、日常生活の中から課題を設定し、その解決に向けて計画、実践、評価・改善といった一連の学習過程の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、課題の解決に向けて自分なりに考え、表現するなどして資質・能力を身に付ける学びである。

図 生活の営みに係る見方・考え方



※主として捉える見方や考え方については、大きい丸で示している。

取り上げる内容や題材構成等により、どのような見方や考え方を重視するかは異なる。

(出典 H28 教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめ)

例えば、題材全体を通した問いとして「健康で元気になるにはどのような食事をとればよいか」という課題を解決していく学習をする。子供たちは、その課題解決のために「生活の営みに係る見方・考え方」である「健康」の視点から日常生活を見つめる。そして一連の学習過程の中で、自分の生活経験や学んだ知識（事実に基づく知識）を関連付けて考え、理解を深めていく。このような学びを通して、本質的な「健康」という概念が習得され質的に高まったり、技能の定着が図られたりする。

### ① 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着

題材ごとに、発達段階に応じた基礎的・基本的な知識及び技能を明確にする。子供たちには、これまでに「知っていること」や生活経験と結び付けて、学習内容への必要感をもたせる。さらに試しの活動や観察、調査、実験等の活動を通して実感を伴って理解できるよう工夫する。また、調理や製作等の手順の根拠について考えることにより、科学的な理解にもつなげる。例えば、みそ汁の調理で「なぜ材料をこの順番で入れるのだろう」ということを、実習を通して理解し他の材料や料理に応用できるようにしたり、ボタンの付け方で「ボタンと布の間に2～3回糸を巻くのはなぜだろう」と観察して理解させたりする。このように実践的・体験的な活動を通して、確かな知識及び技能の習得を図る。

また、製作物の見本、段階見本、試行用の教材、コンピュータなどを活用した教材・教具等、子供が活用できるように学習環境を整備する。さらに、子供の特性や生活体験を把握し、ティームティーチングや少人数指導を取り入れ学習形態を工夫する。ゲストティーチャーやボランティアとして地域の人材を活用するなど指導体制を整え、個に応じた指導を充実する。

### ② 問題解決的な学習の工夫

題材全体を通して、次の5段階の学習過程を設定して問題解決的な学習を進める。

とらえる	見通す	確かめる	振り返る	生かす
生活の課題発見	解決方法の検討と計画	課題解決に向けた実践活動	実践活動の評価・改善	家庭・地域での実践
生活を見つめ、生活の中から問題を見だし、子供自らが解決すべき課題をもつ	生活に関わる知識及び技能を習得し、解決の見通しに向けての自分なりの計画を立てる	課題解決に向けて実践し、互いの考えを伝え合い、自らの考えを広げ深める	実践した結果を発表し、評価・改善する	家庭や地域で実践するとともに、新たな課題を見付ける

### ③ 言語活動の充実

自らの考えを広げ深めるために、家族へのインタビューや身近な人々と会話を通して考える活動や、子供同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたりする活動を工夫する。

例えば、「確かめる」過程では、試しの活動や実験・実習等を協働して行い、その結果をグループで話し合うことにより、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見付け、より深く考える。その際グループの考えを言葉や図表等にまとめ、コンピュータや情報通信ネットワーク等を活用し、互いの考えを可視化して比較できるように工夫する。また、その際には、家庭科で用いる生活に関連の深い様々な言葉が実感を伴った明確な概念として形作られるように配慮する。このような活動を通して、身近な生活への理解が深まるとともに、学んだことを生活に活用する能力を身に付けることができるようになると思う。

### ④ 家庭や地域との連携

子供たちが学習により、身に付けた知識及び技能を、実際の生活で生かすよう実践を積み重ねることが大切である。家族からの励ましや称賛は子供にとって大きな喜びや自信となり、家族の一員として自分が成長していることや家族の大切さに気付くことができる。家庭科通信・実践カードのやりとりなどを通じて、家庭に協力を依頼し、継続して実践できるようにする。

さらに、幼児又は低学年の児童や高齢者など異なる世代の人々と関わる活動等も考えられることから、教育活動に必要な人的又は物的な支援体制を地域の人々の協力を得ながら整えるなど、地域との連携を図る必要がある。特に「A家族・家庭生活」の(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」においては、家庭や地域と積極的に連携を図り、学習を効果的に進めることができるようにする。

## (3) 指導に生かす評価の工夫

### ① 「指導と評価の計画」の作成

学習目標を実現するために、教師自身が題材の指導目標を明らかにすることにより、何をどのように評価するのかを明確にする。さらに、どの子ども生き生きと主体的に課題を解決し、目標を達成することができるように、具体的な学習活動に即して評価場面や評価方法を明確にし、指導と評価の一体化が図れるように「指導と評価の計画」を作成する。

合わせて、一人一人にきめ細やかな指導や支援ができるように、学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図や具体的な手立てを明確にして計画を立てておく。

### ② 自分の成長を実感させる評価の工夫

子供たちの思考の流れや変容がわかるワークシートを工夫することで、一人一人の思考の深まりやつまづきを把握し、身に付けさせたい能力を適切に評価し、次の指導に生かしていく。

学習の振り返りの場面では、自己評価や相互評価を工夫し、できるようになったことを具体的に振り返ることで、「自分なりに解決できた」「生活に生かすことができた」と、自分にもできた達成感を味わわせ、自分の成長を実感できるように工夫する。さらに新たな課題を発見・改善させ、「もっとできるようになりたい」と生活を豊かにしようと工夫する実践的な態度につながっていく。

### 【引用・参考資料】

文部科学省 「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 家庭編」平成29年7月

筒井恭子 「家庭科における資質・能力の育成に向けた授業づくり」初等教育資料 平成30年7月号